

繫縛^{けいばく}

男になりたい。それが無理なら同性でもいいから結ばれたいと思ったことはあるだろうか。私はある。

と、ひとり心の内で語っているのは、彼女を前になんとか平静を保とうとしているからだった。

私は今、裸身の少女にひしと抱きつかれていた。

「お姉様、お会いしとうございました……！」

「あー、 ちゃん、この状況はちょっとまずいかな」

私が言うのと、SCP・166はすぐさま離れ、申し訳なさそうに眉を下げた。

「すみません、苦しかったですか？」

「いいや。君が衣服に触れるのは良くないだろうから」

「僅かな間なら問題ありませんわ」

と、再び距離をつめる彼女に慌てて言葉を続けた。

「それに、君にハグされると心臓がうるさくてね」

SCP - 166は桜色の頬を膨らませた。

「だって……お姉様だったら、なかなかお越しにならないんですもの」

「ごめん。色々と忙しかったんだ」

申し訳ないような、後ろめたいような心地になる。

久しく訪問していなかったのは、同性には影響を与えないはずのSCP - 166に魅了されてしまったからだ。前回の面会で辛くも理性を繋ぎ止めた私は、彼女の影響下から逃れようと心理カウンセリングを受け、こうして再会するまでに長い時間を置いたのである。

それはいくらか功を奏したようで、彼女のスレンダーな身体を目にしても、悟りに達した仙人のように落ち着いていられるようになった。——彼女が悪意のない誘惑をしなければの話だが。

「さあ、髪を梳かしてあげよう」

心を鎮めながら私が言うのと、彼女は軽やかに鏡台の前へ座った。にこにこ鏡越しに見つめてくる。

私は穏やかに微笑み返し、絹糸に櫛を入れた。細く柔らかな髪がさらさらと音をたてて流れ落ちていく。

SCP - 166が財団に保護されてから数年が経つ。彼女は変わらず絵画から出てきたような美しさのまま、この保護部屋に住んでいる。

隣の監視所から初めて呼びかけたのはいつのことだったか。彼女の特性上、関わることができるのは女性職員に限られるので、当時、新米警備員だった自分までもが駆り出されたのだ。

SCP - 166は長い付き合いになった私を姉のように慕い、私もまた、彼女を愛おしく思うようになった。

それはいけないことだったのだろうか。

月日が経つにつれ、妹に抱くような愛情のほかに、邪な感情が膨れてきたのだ。

彼女はときどき、ぞくつとするほど艶めかしく見える。薄いばら色の肌や、形のよい唇に情欲をくすぐられるのが、私はつらかった。彼女の魔力は男性のみに作用するはずなのに、自分にも効き目があるようだった。

もし私が一線を越えてしまえば、貞淑な少女を人間不信に陥れるのは間違いない。

いつ溢れるかわからないコップを持って彼女に会うのも、そろそろ限界だった。

「お姉様」と呼ぶ鈴の音で我に返った。「どうかなさったのですか？ 浮かない顔をしておられます」

私はなんでもないよと首を振った。

「君に似合いそうな髪型を考えていたんだ」

「髪型……ですか？」

「随分と伸びたし、そろそろ切ってもいい頃じゃないかな」

「そうですね。またすぐ伸びてしまいますけど」

SCP - 166は髪を「房手」に取り、ため息をついた。彼女の髪の成長は常人の何倍も速いため、見た目の変化を楽しむ余裕がない。そのうえ着飾ることすら許されないのだ。

「私はボブがいいんじゃないかと思う」

SCP - 166が合点のいかない顔をしているので、「このくらいの長さのことだよ」と梳いた髪をふわりと丸めてみせると、彼女はたちまち目を輝かせて、

「いいですね。そうしましょう」

と声を弾ませた。

「他にも髪型はたくさんあるけどね。よければヘアカタログを取り寄せようか？」
「いえ、ボブで良いのです」

SCP - 166は「言」切った。そして上目遣いに私を見、照れたように笑った。

「お姉様が、私に似合うと……そうおっしゃったから」

胸が締め付けられる気がした。思わず彼女から目を逸らす。

（何度私を試せば気がすむんだ、この子は……）

彼女を抱きしめてしまいたい衝動に耐え、私は震えそうな声で言った。

「じゃあ、美容師に伝えておくよ」

「君の担当を外れることになった」

その一言はどうしても喉につかえて、結局言い出すことができなかった。